



## 公開共同研究 「政治哲学研究会」

(主催：大竹弘二、金杭、森田團、早尾貴紀、萱野稔人)

本研究会は、世俗化（政教分離）の過程を通じて形成されてきたと言われる近代政治システムの哲学的再考を目的としている。「政治的なもの」が「神学的なもの」から自律することは、近代国家主権が成立するための本質的な契機であり、それによって「政治的なもの」は、宗教との緊張関係のなかで自らに固有の秩序形成の原理を追求するようになった。ナショナリズムもまた、そうした緊張関係から生み出された一つの効果にほかならない。

しかし今日、こうした世俗化に基づく近代政治システムは、その前提が大きく問われるようになってきている。9・11テロを待つまでもなく、冷戦後の世界は、従来の主権国家の枠組とは根本的に別種の対立・抗争を生み出している。サミュエル・ハンチントンが湾岸戦争を経た時点で、「文明の衝突」というビジョンを打ち出したが、そこで言われる「文明」は、宗教上のブロックとほとんど同義である。いまや暴力の集団的な行使は、世俗化した国民国家を単位とするよりは、宗教的・文化的等の紐帯に基づいているようにすら見える。

こうした情勢を踏まえ、国家や暴力の問題を軸にして政治と宗教の関係を多面的に捉え直すのが、この研究会の目的である。かつてカール・シュミットが、「現代国家理論の重要概念は、すべて世俗化された神学概念である」と述べたように、神学的なロジックは、国家そのもののうちに入り込んでいるともみなせるのだ。つまり、近代においても、「政治的なもの」は「神学的なもの」から単純に切り離されているわけではなく、それらは非常に錯綜した関係にある。この研究会は、主権国家および近代政治システムの哲学的な考察を通じて、この錯綜した関係を少しでも解きほぐすことを試みる。かくしてそこでは、政治システムをめぐる概念的な考察と、状況についてのアクチュアルな問いとが往復運動を描くような討論の場をつくることが目指されるだろう。

(研究会開催の詳細はUTCPのHPで随時告知します。  
研究会には津田塾大学の萱野稔人氏も毎回参加されます。)

